OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国人留学生のライフストーリーにみる留学の満足：大学生活に対する期待との関わりから
Author(s)	中山, 亜紀子
Citation	阪大日本語研究. 2008, 20, p. 197-223
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12415
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

韓国人留学生のライフストーリーにみる留学の満足
—大学生活に対する期待との関わりから—

Satisfaction with University Life:
Account of a Korean Student in Japanese University

中山 亜紀子
NAKAYAMA Akiko

キーワード：日韓共同理工系学部留学生事業、ライフストーリー、韓国人留学生、
留学の満足、大学生活

【要旨】

日本の留学生活に対する満足をキーワードとした研究は、現在までいくつか発表されているが、ほとんどが量的研究であった。一人一人の留学生がなぜ満足を感じ、なぜ満足が感じられないのかを知ることは、今後留学生支援をソフト面から充実させていく際にも有益であろう。本稿では、日韓共同理工系学部留学プログラムで虹野大学（仮名）に留学してきたW君のライフストーリーを紹介した。W君は「勉強」することと友人と「遊ぶ」ことの二点を虹野大学の生活に期待していたが、その期待通りにいかないことがW君の不満足の原因であった。そのことはW君が虹野大学の中で、韓国で社会化された際に得た知識で行動しており、日本の知識をつけ足した自分が心地よいと感じるmiddle wayを見つけられていないからだとも言い換えることができる。その意味でW君の不満は、留学生に広く共有され得る問題ではないかと考察した。

１．はじめに

現在、日本の高等教育機関では、多くの留学生が学んでいる。その数は平成18年５月１日現在、117,927人に上っている（日本学生支援機構）。今や大学で留学生が学ぶ風景は全く珍しいものではなくなっている[1)]。

留学生と日々接する者の中で、留学生が所期の目的を達成して留学生活を終え、次のステップへと進んでくれることを望まない者はいないだろう。加えて、その留学生活が充実して満足のいくものであったなら、これほど喜ばしいことはなかろう。

さて、留学生の日本留学に対する評価は、国際教育市場における日本留学の価値を知る手段として、大きな意味をもってきた。早くは岩男・萩原（1988）が留学生市場の中で日本留学をより魅力的にするにはどうすればいいのかという視点から、留学生、元留学生を対象にアンケートによる調査を行い、出身国別、年齢別、滞在期間別などさまざまな属性に区分して分析している。ほぼ10年にわたる大規模なこの調査から、日本に留学してしばらくたってからのほうが日本に対する印象が悪いこと、住宅を借りられないなどの差別を受けていることなどが明らかになった。そして、日本社会の閉鎖性が指摘され、「国際化時代」の日本に対して大きな反省を促すものとなった。

以後、岩男・萩原のような大掛かりな調査は行われていないが、一つの教育機関に属する留学生を対象にいくつかの調査は行われている。留学生の評価をもとにカリキュラムや支援方針を見直し、改善することがその目的である。たとえば荻原・今村（1987）、金城（2003）、玉岡・中矢（2006）などが挙げられる。

それだけではなく、留学に対する満足はどのように規定されているのかを理解しようという研究もわずかながら見られる。坂野・岡・光元（2004）は日本語能力と留学の満足度の関係について調査し、日本語への自己評価が高いもののほうが留学生活への満足度が高いという結果を得ている。また、大学生活の満足を規定する要因について日本人学生と留学生との比較から論じたものとしては荒井・広沢（2003）が、中国人留学生に満足を与えている要因を探ったものに岡・深田・周（1996）、坂野・岡・光元（2003）がある。

留学生の日本留学の満足をトピックとした研究としては、以上のようなものがあるが、研究そのものが少ない。その理由としては、留学生の満足／不満足が、留学生の適応を表していると考えられ、満足／不満足に対する関心が、留学生の適応や異文化トレーニングなどの方向に向けられたからではないかと推測される。

適応の研究では、留学生が直面する問題として、①外国に居住する問題、②自分の感情を表したり、知的な独立を果たすという青年期の問題、③高等教育に関連するアカデミックな問題の３つが挙げられている（Furnham＆Tresize, 1983、Furnham, 1997: 14 再引）。

留学生の適応の研究にしろ、留学に対する満足を正面にすえた研究にしろ、社会心理学的研究は、統計などの手法を使っているために、一般的な傾向は明らかになるのだが、なぜそのような傾向が出てきたのか、留学生の内的な要因についての説明はない。さらに、留学生が大学というコミュニティに参加し、そこでの様式を学んでいくということは、「アイデンティティ、コンピテンス、権力、アクセス、主体（エージェンシー）」などに深く関わっている（Morita, 2004: 573）という点を完全に見落としている。大学だけではなく、アカデミックな世界の様式を学ぶことは、与えられた知識や技術を身につけるだけの単純なものではなく、ア

イデンティティや文化、権力関係などの入り混じった複雑な過程であることが明らかになっている（Duff, 2002）。

本稿は、日韓共同理工系学部留学生事業によって高校卒業後1年の予備教育を経て虹野大学（仮名）に入学した韓国人留学生W君[2]（仮名）のライフストーリーを紹介し、当事者である留学生にとって、日本で大学生活を送るとはどのような経験であるのか、W君の視点から考察したい。その際、W君にとって「満足」できる大学生活とはどのようなものなのかに注目する。なぜなら、W君はインタビューの中ではっきりと「学生生活がおもしろくない」と言っているからである。ライフストーリーの中から、彼の「学生生活がおもしろくない」原因を探ることによって、留学という体験の本質を垣間見ようという試みである。そこから、留学生活をサポートする際の重要な洞察と示唆が得られるに違いない。

2．ライフストーリーについて

ここでは、ライフストーリーについて、本稿の立場を述べておきたい。

ライフストーリーは、ライフヒストリー、オーラルヒストリーなどと並んで、ある個人とその人の体験を明らかにするため、研究者に対して語られたことや文書などの記録をデータとして用いる「伝記的研究」（Creswell, 1998）に分類される質的研究の一つである。Mannによれば、文学の形式をもつ自伝や伝記、歴史的また歴史的真実を追究するライフヒストリーに対して、ライフストーリーは体験的真実を表しているという（Mann, 1992: 272）。現在、ライフストーリーは、社会学（山田, 2005、浅野, 2001など）、心理学（やまだ, 2000、能智, 2006など）、第二言語習得研究（Pavlenko, 2004、Kinginger, 2004など）などで幅広く用いられている。

本稿では、ライフストーリーを「自己物語」としてとらえる。自己物語（self narrative）とは、「個人が自己関連的な事象の関係を時系列にそって説明すること」を指しており、もう少し具体的に言えば、「到達点あるいは価値を帯びた終点を設定すること」、および、それに準拠して「到達点が多少なりとも蓋然的（ありそうなものに）なるように、進行する諸事件を選択・配列する」という営為のこと（浅野, 2001: 237）およびそのようにして語られたストーリーのことである。

自己物語は、その人自身を映し出すものとして、他者に対して、またその人自身に対して語られる。ガーゲン（2004）は「われわれは物語によって生きているということである—自己を語るという意味でも、自己を実現するという意味でも（ガーゲン, 2004: 248）」と述べている。

またそれは、人の現在によって、常に「書き換え」られるものである（エプストン＆ホワイト, 1997）。さらに、話す相手によって、その内容は常に再構築されるものである（ホルスタイン＆グブリアム, 2004、Kvale, 1996、桜井, 2000、2005、ガーゲン, 2004）。

このように、自己物語は、ある人の人生についてのストーリーでありながら、語られる時点によって、また聴き手によって、そのバージョンが変わるものだといえる。

もう一つ注意しておかなければならないことは、協力者が語った話を「ストーリー」として聴き取る側の問題である。協力者が語った話は、聴き手によって「ストーリー」として聴き取られなければならない。ブルーナー（1998）はイーザーをひいて「読者はそれを作り上げることによって、それを受け取る（ブルーナー, 1998: 39）」と述べている。つまり、読者がストーリーの「題材」を、彼／彼女のレパートリーと調和させることによって実在のテクストの影響の下に彼／彼女自身のテクストを構築するということが読むという行為であり、それによって、読者はストーリーの中のキャラクターの経験を理解可能なものにするのだ。

このことを研究に当てはめてみると、研究者は、録音されたインタビューを持ち帰り、文字化し、順番を並び替え、さらにある特定の人の話として再話する。言い換えると、これは研究者にとって首尾一貫した話として解釈しなおす、解釈行為に他ならないということになる。フランク（2004）は病いの語りの分析の中で、「混沌の語り」を一つの型としてあげているが、これが一つの語りであると気づくのにずいぶん時間がかかったとしている。この例からもわかるように、研究者は協力者の話を自分にとって首尾一貫した自分にとって聞き取りやすい話にしてしまう恐れがあるのである。

再話するということは、協力者の話の中から研究者に届くストーリーを語るという行為に他ならない。ライフストーリーという研究手法には、本質的に研究者が抜き差しならないところまで深く関与していると考えた時、恐れおののかざるを得ない。

本稿では、ストーリーを協力者に返して、確認をとり、筆者の独善的なストーリー解釈をなるべく排そうとした。さらに、ストーリーの中に協力者のインタビューからの引用を多く残すことによって、協力者の「声」がなるべく大きく聞こえるように試みた。さらにインタビューの中では、相互に矛盾した評価が語られることがあったが、それを敢えて残すことで、ある一つの出来事を評価している協力者の中での多声性を保持しようとした。

3．調査概要

3. 1. 調査協力者と日韓共同理工系学部留学プログラム

先に述べたように、本稿の調査協力者は、日韓共同理工系学部留学生事業（以下、日韓プログラム）で虹野大学に留学してきた韓国人留学生W君である。

日韓プログラムとは、1999年から10年の年限を設けて実施されている学部留学制度[3]で、日韓両政府が費用を折半し、毎年100名の高校卒業者を選抜して日本の大学の理工系学部に派遣し、4年間の生活を送らせるというものだ。日韓プログラムは文部科学省の国費留学生と同額程度の奨学金が支給され、学費も免除される。4年間の学部生活に先立って、日本語および専門科目の予備教育を1年間（前半を韓国のキョンヒ大学で、後半を原則的に日本の配置先大学で）受ける。さらに、奨学金が支給されるのは、4年のみで、大学院に進学する場合は私費留学生になる。

第1期から第3期までは配置先大学は、キョンヒ大学での予備教育中に実施される試験によって決まっていた。その後は、日韓プログラム留学生としての選抜試験が配置先大学を決める試験も兼ねるようになっている。

日韓プログラムの学生の中で兵役がしばしば話題になる。韓国は24ヶ月の男子皆徴兵制をとっているため、この義務をどの時期に、どのような形で果たすのかは大きな問題であり、大学院進学、就職などすべてにわたって影響を及ぼしている。韓国の大学に進学した男子学生は、一般に大学1，2年生頃に休学して兵役に行く。本プログラムに参加している者は、休学すると奨学金の支給を受けられなくなるため、韓国の大学生と同じように休学することはできない。筆者が知っている限りでは、理工系の場合、韓国内の特定の大学院に行けば兵役が免除される場合がある。また直接兵役につかなくても大学、大学院修了後、特定の会社で一定の年数働けば、兵役の代わりになるなどの制度もある。

W君は筆者が予備教育を担当した学生の一人である。予備教育中は、その学年の中で一番まじめに授業に参加し、同期生の中で日本語が上手な学生の一人であった。予備教育が終わったあとは、1年に数回偶然にキャンパスで出会ったり、日本人学生といっしょにレストランで食事している場面に出会ったりした。会っても長い時間話すことは非常に稀であったが、彼が一人でいるときはしばらくの間話をすることができた。話をするときはほとんど韓国語で会話[4]をしていた。1年生の時は受講している授業数の多さの話を何回かしたことが印象的であった。彼が3年生の夏休み前に偶然会ったときは、高校時代が懐かしいと話していた。

また、虹野大学は、日本有数の大都市圏に位置する総合大学だ。その歴史は比較的古く、

戦前にまで遡ることができる。いくつかの理系の学部と文系の学部がある。また、日本の多くの大都市圏にある総合大学の例に漏れず、複数のキャンパスがある。

3. 2. インタビューと分析の手順

それまで調査をした日韓理工系学部留学生とは違うタイプ[5]の協力者として、筆者は彼に直接調査依頼を行った。インタビュー時、W君は大学4年生であった。6ヶ月の間に4回のインタビューを行った[6]。インタビューはほとんど韓国語で行われた。各インタビューで録音したものの長さと場所は以下のとおりである。

1回目　91分07秒　キャンパス内のあまり人のいない食堂
2回目　88分46秒　キャンパス内の空き教室
3回目　64分51秒　キャンパス内の食堂
4回目　83分34秒　キャンパス内の食堂

この4回のインタビューに加えて、筆者が作成したW君のストーリーの内容確認を目的としたインタビューを1回[7]行っている。そのインタビューも他のインタビューと同じ手順を使って文字化された。本稿では主に上記の4回のインタビューで話されたことを用い、ストーリー確認時に話されたことは、補足的に用いる。本調査の元来の目的は韓国人留学生の日本語上達のライフストーリーを作成することであった。したがって調査は、どのように日本語が上手になったのかその軌跡を聞くことから始まったが、虹野大学の生活の「おもしろくなさ」について多くが語られ、筆者もその内容について多く質問した。

インタビュー終了後、韓国人の母語話者に韓国語による文字化を依頼し、できたものを筆者が見直した。また、その日本語訳を筆者がつけた。その後出来事を時間軸に並べ替え、日本語でストーリーを作った。その際、到達点として現在のW君を設定し、到達点に至るまでの筋道が理解できるように、インタビューの中で語られた過去の出来事を配置した。インタビューの翻訳に際しては、意訳は避け、日本語として意味が通じる限り、協力者の言葉を残すように努めた。短い協力者の言葉の引用は「　」で、長いものは行を変えインデントする形で示してある。ストーリー中のイタリックの部分は日本語で話された箇所である。なおプライバシー保護のため、大筋を乱さない程度にインタビューの内容を変更している。

4．W君のライフストーリー

子どもの頃

W君は大都市近郊の田園地帯の農家に、男3人兄弟の末っ子として生まれた。家の周辺は今でも「本当に360度田んぼ」だ。村の人々はほとんど知り合いで、「農繁期は仕事がすごく多いんだけど、無い時は悠々自適」の生活をしている。

田舎の生活は、空気もおいしくいいことはいいのだが、「文化生活（は水準）が落ちる」。幼い頃、W君がすることといえば、テレビでアニメを見るか、友だちと遊ぶか、本を読むことしかなかった。しかし、家の周辺にはいっしょに遊べる同じ年の子が少なかった。W君は兄や兄の友だちと遊ぶか、でなければ本を読んでいた。

> 僕の村に同じ年が3人しかいませんでした。僕を除いて。だから自然とテレビを見るか、じゃなかったら本を読むことになるんだけど、小さい時はテレビで見るものがありますか？アニメを見れば終わりで、残るのは本しかないじゃないですか。それで本を読んだ記憶があります。

村には本屋がなかったので、学校の本を借りて読んだり、家の百科事典を読んだりした。

> W君：百科事典は以外に面白いんですよ。
> 筆者：えー本当に？
> W君：小さかった時は。
> 筆者：何が面白かったの？
> W君：化学とかがあるじゃないですか。化学とか見て、何かおもしろいものは作れないかなって。へへへ。

またW君は「賢い感じがする」ので、漢字が好きだった。「まず勉強して他の人より前にでなくちゃいけないと思っていた」こともあるかもしれない。小学校1年生からは、一人で千字文[8]を覚え始めた。小学校3年生までに400字まで覚えた。それ以降はどうやっても頭に入らず諦めてしまったが…。それから学校で習うより「先に」一人で本を読んで勉強するのも好きだった。先に勉強すると、「頭の中で知識が熟成する」からか、学校で習う時は理解が早かった。W君はそれ以外特に勉強したわけではないのに、学校でよい成績だった。兄弟の中でも勉強が一番よくできた。漢字を知っていたり、勉強がよくできる

ことは、親の関心を引いたり、兄たちからいじめられなくなる「防護膜」の役割もしてくれていた。

> だから大きいお兄ちゃんが小さいお兄ちゃんをいじめているのを見て、僕はいじめられないようにしなくちゃって思ってそうしたんです。

その「措置」のおかげでいじめられずにすんだ。両親は仕事が忙しかったこともあり、「勉強は放っておけば自分でするだろう」という方針だった。漢字を勉強しているW君を見ても特にほめるという事もなかった。

今その気持ちを維持することができないのだが、小さい頃は「なんでもしたいと思う」子で、「変なことをたくさんした」。例えば、いらない電化製品などを分解するのも好きだった。分解したら最後、組み立てることはできなかったのだが…。

最初W君がなりたいものは、韓国銀行の総裁だった。お金を「自分の心のままに」運用できるからだ。今でもそうなのだが、「農業で採算を維持するのは天の星を取るより難しい」。W君の両親が「農業をして帰ってきて、すごく疲れているのを見たら」、「子ども心に」孝行しなくてはと思った。その気持ちは今も続いていて、成功して「ある程度親孝行もしたい」と思っている。

W君は、勉強以外のことはあまりできなかった。中学校は、抽選で決められた中学校に進学した[9]。同じ小学校から行った子は二人しかいなかった。そのころ、W君の「頭が若干儒教的にできている」せいか、四書五経の中の一部を韓国語で読んだ。儒教は、「長く続く概念」だし、簡単に言ってしまえば、「古典が好き」なのだ。そのころから、特に親孝行をしたいと考えるようになった。

> だからだから、両親が僕に悪いことをしたことがないのに、いい事をしてくれたから報恩でしょ。簡単に言えば。でも、(W君は今は) 遊んでいるけど。

中学校では模範生というわけではなかったが、「(宿題など) 自分がするべきことだけは全部」していた。学校の定期試験より模擬テストのほうがいい点数がとれた。高校は、受験をして、その地域で一番いい高校に行ったが、入るのはそれほど難しくなかった。中学で親しかった子たちはみんな同じ高校に行った。クラブ活動[10] などはなかった。

高校のときは、最初大学に行こうとだけ思っていた。国語で詩などを勉強しても感銘を受けたこともなく、英語は中学校の時に説教ばかりする先生に習ってから嫌いだった。数

学や物理が理解しやすかったので理工系を志望した。

高校時代は今と比べると「何かが活動的」で「一秒の長さが違っていた」。朝6時半に起きて、15分で支度して、6時45分には家を出る。学校までは自転車で行った。その頃は信号が変るのを見たら全力でペダルを踏むことができた。そして学校に着いて授業を受ける。10時ごろになるとお腹がすきだすのだが、昼休みまで我慢して、4時間目が終わったら弁当を食べる。するとご飯が本当においしくたくさん食べられた。また午後には授業を受けたあと、自律学習[11]をした。高校3年生になると、晩御飯は学校の近くで食べて、学校に12時近くまで残っていた。家に帰ると少し勉強して、寝た。

このような家と学校の往復で、いわゆる「正しい生活」だったが、あの頃は、本当に勉強しようというやる気にあふれていた。とにかく勉強は難しくなく、理解しやすかった。先生から特別に説明を受けなくても、本さえ見ればわかった。「それを考えれば今解けないのが不思議だ。」

高校3年生の時、担任の先生から日韓プログラムのことを聞いた。その頃は「特に外国にいきたいとかそういう考えはな」く、成績もそれほど悪くなかったので、韓国の大学に行こうと思っていたが、兄たちが大学に行っている時期で、家の経済的な状況はそれほどよくなかった。

> お金もくれるし、あの時、僕の家をみると、経済がよくない状態だったんですね。上の兄が大学を出て、下の兄が大学に入って、僕まで大学に入ったら、かなりの負担になったんです。そっちのほう（の理由）で（日本に）行ってみようと思って、来たんです。それに一度外国にでてみるのもいいんじゃないかと思って。

W君は日韓プログラムに応募することにした。その合否が出る前に修能試験[12]があったので、修能試験も受けた。修能試験の結果は、W君の高校で二等の好成績だった。そのまま二次テストを受けていれば、学部学科さえ問わなければソウル大学にも行けたのではないかと思う。でも日韓プログラムに合格していることを教えてくれる人がいたので、二次テストは受けず、家の手伝いなどをしていた。

日韓プログラムに合格したことがわかり、高校を卒業する前に、W君は同じ高校の日韓プログラムに合格した子たちといっしょに日本語の塾に通い始めた。W君はそこで始めて日本語に触れ、日本語の文法の基礎を学んだ。その程度勉強すれば「文法のほうは、だいたいコツがつかめた」。

キョンヒ大学

高校を卒業し、予備教育のキョンヒ大学に入った。ソウルに向かう日はふるさとを離れるのが辛かったが、予備教育が始まってからは、寮に住み、日韓プログラムの雰囲気になじんで楽しく暮らした。キョンヒ大の学生たちとは遊ばなかったが、日韓プログラムの学生同士でＰＣ房[13]に行ったり、夜に配達を頼んでいっしょに食べたりした。「今までの人生の中で一番よく遊んだのがこの時期だろう。」

政府からもらう「生活補助金」はあまりなかったが、両親からの仕送りを足すと十分に遊ぶことができた。

W君：韓国はまた、遊ぶ文化が安いです。
筆者：そうだそうだ。
W君：家からもある程度入れてくれるじゃないですか。だからいいと思って。だけど、日本に来たら確実にお金の使い方が変ります。お金がドンドン出て行きます。

キョンヒ大の予備教育では、日本語の語彙が伸びた。文法は塾で学んだこと以上には伸びなかったと思う。それに日本語の授業がどうだったかあまり覚えていない。

専門の授業はおもしろかった。特に数学がおもしろかった。

筆者：（学科の人たちだけではなく）Wも勉強が好きそうに見えるんだけど、Wも勉強が好き？
W君：だから解けると面白いでしょ。問題を解くとき、解けなかったらすごく腹がたつ。

それで日本の大学はすべて数学関係の学科に志望を出した。今考えてみると、もう少し就職に有利な学科を志望しておけば、今将来の心配はあまりしなくてもよかったのではないかと思う。

テストの結果、W君は虹野大学に来ることになった。虹野大学に関する情報が少なく「不安」な気持ちもあることはあったが、虹野大学という結果にそれなりに満足していた。10月に虹野大学に合格した他の日韓プログラムの学生たちといっしょに日本に来た。

大学生活への期待

虹野大学はW君に、同じプログラムの子たちがいっしょに住める民間のアパートを用意していた。同じプログラムの同期生は男ばかりで、ほとんどキョンヒ大時代から知っている子たちだった。

虹野大学に入学する頃は、W君はこんな大学生活を夢見ていた。

W君：まず、対人関係が広く。
筆者：個人関係[14]が広く。
W君：それから、ひまな時間がない。
筆者：ひまな時間が無い人。
W君：だから、だから、ずっと忙しいような感じ。
筆者：ずっと忙しいような感じ。
W君：それでありながら、（やらないで）残っているものが、だから仕事でやり残しがあるじゃないですか。そんなのがない人。例えば皿洗いをずっとしないとか、そんなのはなくて、寝る時には、皿洗いがちゃんとできている。そんな感じがあるじゃないですか。そんなの。

このように多くの友人を持って忙しく、また「何かの社会現象に対して考えて、何か探究心もあって」「活発」な生活を思い描いていた。こんな大学生像は、たぶんテレビの情報から出てきたものではないかと思う。そのような生活への期待とともに、W君はいい先生と出会って、「勉強を一生懸命すること」を期待していた。そして、「博識」になりたかった。

W君：だから僕の昔の期待は、いい先生に会って、それから、ちょっと一生懸命に勉強をして。だから頭がよくなるってそんな感じがあるじゃないですか。なんていえばいいかな。いい先生に会って、勉強を一生懸命するっていう。
筆者：それだけ期待してきたの？
W君：それが一番、期待値が一番高かったものなんだけど…。

そして、「何かに対する知識はないけど、何かしたいという思い」だけがあって、将来に対する期待が大きかった。また、その頃は、「みんなが緊密に協力して、お互いによく生きる社会」を理想としていた。

入学してから

4月になり、虹野大学に入学した。W君の学科には留学生はW君しかいなかった。W君の学科は「虹野高等学校」と揶揄できるほど、とにかく授業の数が多かった。W君は20コマ登録したが、ほとんど必修で、しかも日韓プログラムの先輩の話によると、成績に占める出席率の割合が非常に高かった。授業の少ない学科の日韓プログラムの同期生が帰るのを見ると「いっしょに帰りたい」と思ったが、「一生懸命にしなくちゃと思っ」てW君はサボらなかった。

また、W君は体育会系のクラブに入った。しかし、そのクラブはとても「格式ばっている」感じがした。その上、昼休みに道具の手入れがあった。W君は授業も多くて忙しかったので、すごく「疲れた」。それで「これはダメだ」と思ってクラブを2週間でやめてしまった。

結局、朝から4限目、5限目まで授業を受け、暗くなる頃に疲れて家に帰るという毎日になった。家に帰れば、近くのスーパーへ行って材料を買い、簡単な晩御飯を作って食べる。それから大学入学前に買ったパソコンでコンピューターゲームをしたり、テレビを見たり、退屈すれば日韓プログラムの同期生の部屋に行って遊んだ。そのアパートでの生活は楽しかった。

みんな集まっていたから。退屈だったら、みんな遊びに行くことができるから、楽しいでしょ。そのとき。今は集まろうとしても難しいですからね。

虹野大学の授業はあまり面白くなかった。たくさん授業があるのに、内容が「段階的になっていなくて、重なっている」部分が多かったのが一つの理由だ。

授業は多いでしょ。なのに進度は遅くなるでしょ。だから同時に授業2つで同じことをしてみてください。どれほど授業がつまらないか。

W君は虹野大学を卒業する頃には、専門に関することが全部分かっているようになりたかったし、それが「正常」だと思っていたが、その目標は達成されそうになくて「イライラ」した。学生たちもそれほど「意欲がなかった」し、先生も「エリートをつくる」という意識が不足していた。

また、授業の中では「やりとり」がなく、ずっと「一方的」に進んでいた。

W君：先生が、その黒板の前でこれは何だって聞いても静かじゃないですか。

筆者：答える人がないでしょ。

W君：何か、人は間違えようと絶対しません。だからといって、強制的に指名することもありません。だからお互いにコミュニケーションがだめなんですよ。そんなのが問題だと思います。だれかが、主導権を握らなくちゃいけないのに、主導権を握る人もいないし、ただお互いに避けようとだけしてるでしょ。僕も避けようとする人だけど。

この「やりとり」のなさは、授業中だけではなく、教室の外でもあった。

W君：だから、初めてきたとき挨拶をしたんですけど、先生のほうで挨拶を受け入れてくれません。

筆者：受け入れてくれないってどんな意味？

W君：挨拶をぺこっとしたら。

筆者：こんにちはって言ったら。

W君：ただ行き過ぎてしまうっていう、そんな風な感じだった思います。

先生だけではなく、学生も先生のことを無視して通り過ぎる。このように先生と学生の間に「親しさ」がないことにW君は今でも「変だなと思ってい」る。

W君：友だちも自分の担当の先生じゃなくて他の先生が通り過ぎたら気を遣わないみたいだし。変だなって思っています。最近。

筆者：今でも？

W君：ええ、とにかくそこから*歯車*が狂いだしたって言わなくちゃいけないのかな。

筆者：えっ！そうなの？

W君：だから、学生生活がおもしろくないじゃないですか。

このように授業は面白くなかったが、「問題を解いているとすごく面白いことが多い」。教科書を買いに本屋に１週間に１回行ったりしながら、W君は専門の勉強を続けていた。

友だちを作ろう

予備教育のころからW君は、昼ごはんを日韓プログラムの同期生や先輩たちといっしょに食べていた。１年生の後期になると、W君は、「日本人の学生と融合ができていない」

と思うようになった。色々考えてみると、日韓プログラムの子たちとは、いつでも遊ぶことができるし、「日本人と親しくなる一番早い道はいっしょにご飯を食べることだ」。W君はこう考えて、1年生のはじめのころに授業で知り合いになった日本人の学生といっしょにご飯を食べることにした。その子たちは勉強の話が好きで、主に宿題の話や専門についての話、本で読んだ知識や自分が調べたことなどについて話した。

昼ごはんを食べながら日本人の学生と会話をすることで、W君の日本語は友だちの言葉のようになり「外国人っぽい言い回し」がなくなって、より自然になっていった。このような体験は、子どもが育ててくれる人の言葉を学んでいくのと同じだと思う。

幼い時から漢字を勉強していたこともあって、「日本語の勉強はやさしかった」と思う。韓国にいたときは、漢字の言葉だと思っていなかったのに、日本語でも同じ漢字を使うことを発見したり、漢字のよく似た読み方を発見するのがおもしろかった。なんとなく話していると、周囲の友だちがW君が言いたいことを理解して、発音を直してくれたりした。それに、テレビを見ることが多かったので、日常語や会話のパターンなどを覚えることもできた。

2年生の後半になるころには、どういえばいいのか「迷う」ことも少なくなり、自分が「言いたいことが日本語で言えるようになってきた」。ある程度は「これぐらいでいいのではないか」と思うこともある。ただ、日本語に「精通することは難しい」。

W君：学びやすいから　あんまり努力をしなくなるでしょ。
筆者：ふーん。
W君：だから。
筆者：ふーん。努力っていうのはどんな努力のことを言ってるの？
W君：だから　ちょっと語彙を広げたりとか、表現をちょっと多様にしたりする努力が不足しているでしょ。だから今は、ただ日本語の中核となる構造とかあるじゃないですか。それを使って、それを適当に調節しながら使うんですよ。

同じ学科の友だちばかりだから、使う言葉も専門用語に限定されている。本や教科書を読んでも「解ける、定義する、解が得られる」などの言葉しか増えない。今でも「ひらがな語は慣れるのに時間がかかる」。

2年生になってからーいろいろな悩み

2年生、3年生と学年があがるにつれて、授業の数は少なくなった。といっても2年生

で14コマ、3年生で10コマだから文科系に比べればずいぶん多い。その上実験があり、実験レポートなど宿題が非常に多くなってきた。友だちと分担して宿題をする子もいたが、W君は「一人でもできるよ」[15]というタイプだったので、徹夜してでもレポートを書いた。分からない部分があるときだけは、友だちと相談した。

その頃は、授業が終わって家に帰り、ご飯を作って食べ、しばらく休んで、夜の10時や12時から宿題に取り掛かる。終わると朝で、そのまま1時間目の授業に出るというふうだった。ほとんど毎日レポートがあったので、毎日徹夜をしていたということになる。この頃は本当にしんどかった。勉強は量も質も含めて、総合的にしんどかった。ストレスが溜まってくると、非常に集中しなければ声が小さい教授の声が聞こえなくなった。ひどい日は、授業に出ても全く聞くことができず、板書を写すだけ写して、後で自分で勉強した。2年生の途中から、虹野大学が準備したアパートを出て、民間のマンションに同期生といっしょに2人で住んでいたのだが、いっしょに住んでいる友だちはガールフレンドができて、あまり帰って来なくなった。授業のない土日になると、家で寝てばかりいることが多く、時間があれば、コンピューターゲームをしたり、テレビを見ることしかしなくなってしまった。結局誰とも話をせず、外にも出ないことが多くなった。

> 日本の娯楽番組があるじゃないですか。そっちのほうを見てもあんまり面白くないし、それに他のことをしようと思っても、コンピューターか勉強しかないでしょ。二つとも選択が誤っているんですよ。それで、外に出てみようかと思うけど、外に出たらお金がかかるし。そうでしょう。だからちょっとむずかしいんですね、おもしろく暮らすのが。考えてみると学校の友だちと外で遊んだことがあんまりありません。

外に出ないと「水が澱むように、生活のリズムが悪くなる」。「引きこもり」になってしまったようだった。このような状態になって、W君はすごくいろいろ悩んだ。今から考えると「しても仕方のない悩み」なのだが…。

一つ目は、いっしょに昼ごはんを食べ、W君の日本語が上手になっても、学科の日本人の友だちとの関係はそれほど広がらなかったし、深まらないことだった。

W君の学科の特徴かもしれないが、「一人でいてもあまり問題がない」子が多く、自分のほうから、「遊びに行こう」や「飲みに行こう」とは言わない。なんとなく行きたそうにはしているのだが、結局だれも言い出さないので、そのままになってしまうことが何度もあった。

W君は日本語韓国語を問わず、「話す才能がな」く、「言葉に詰まったら黙っている」性

格である上に、村の全員が知り合いという環境に育ったせいで「人と交際するっていう技術」がない。

普通の時は用件がなくても電話する場合があるじゃないですか。だけど、僕は用件がなかったら電話しません。だからどうかすると一人で遊ぶ、こうなるんでしょ。

このように「連絡をしない」せいで、なかなか友だちに会うことができなかった。たまに連絡してみても「僕が思うように回らない時」が多かった。

大学のシステムにも原因があるかもしれない。高校までは同じクラスだったらみんな遊ぶが、日本の大学では「勉強は学校でする」が、遊ぶときはサークルに入って遊び、クラスの中では遊ばない。韓国では同じ学科の同級生だけではなく先輩や後輩との人間関係を重視し、ＭＴ[16]など「強制」的に知り合いになるシステムが存在するが、日本の大学ではそのようなものがない。

何か韓国では、人と人の関係を重要視するんですよ。先輩と後輩も知っているし、ほとんど学科の友だちも知って、そんな関係だったんですね、僕の理想的には。日本は先輩と後輩の関係も全くないじゃないですか。

4年生の今まで、W君が日本人の友だちと学校の外で会ったことは数えるほどしかない。今でも、顔だけ知っているような学科の友だちなどとは、「よそよそしい感じがする」。

だから日本人に対して感じる全体的な感情は何かといえば、簡単に親しくなることができません。人々と。

二つ目は金銭的な悩みだ。両親が農業で一生懸命働いているのに、W君は奨学金をもらっているとはいえ、そのお金を浪費してバッと遊ぶ気にはならなかった。

だから、まあ、両親がそんなふうに仕事をしているのに、お金をばっと使ってもいいのかっていうのがあるでしょう。そんなことも考えなくちゃいけないし。そんなことも考えているうちに、あんまり遊びまわらなかったってことでしょう

将来のことも心配だった。韓国にいたら、今頃は他の韓国人の友だちと同じように軍隊

に行っているかもしれなかった。

W君：だから　韓国にいたらもうちょっと楽じゃなかったかなという考えでしょ
筆者：楽？
W君：だから、自分が考えて、そうして決定して、そんなのがないでしょ。だから、周辺の子たちが行けばいっしょに行こうっていうそれで。だけど、軍隊に行くのも考えなくちゃいけないし、苦しいです。

あれほど勉強していたのに、高校の時に比べると、「頭にちゃんと入らなくなった」。

W君：何か昔考えていたほどには勉強していません。勉強はしなくちゃいけないんだけど、何か混乱しているじゃないですか。
筆者：混乱してるって？
W君：だから迷う。何か変わる…僕が変わったみたいです。

こんなふうに悩んでいると、「頭がクリアじゃない」し、「日本にいると（何かを）するのがいやにな」った。お腹もあまりすかないし、自転車も昔ほど全力でこげない。何かしようと思っても「面倒くさいな」となってしまう。「活発的ではない」感じがして、「家の中をグルグル回っている」だけのような気がした。「段々ダメ人間になって」いくようだった。そして、韓国の自分の家に帰りたくなった。

W君：田舎に行けば、関係がない人はほとんどいないんですね。
筆者：みんな知ってる人でしょ。
W君：ええ。そしたら何か楽じゃないですか。だからたぶんそのせいだと思う。もともと田舎者だから、帰って不便ということもないし。

おじいさんが「都会地は人が住むところではない」と言っていたことを思い出した。

おもしろくない大学生活だけど

3年生になってからW君は芸術系のクラブに入った。大枚をはたいて道具も買った。そのクラブの人たちは、ちょっと変わった人たちが多かった。女の子なのに、残酷なものを見に行ったり、何気なく留年したり、日本に来て初めて出会った変わった人たちだった。

本当に自分のやりたいようにしている人々で、その雰囲気が気に入った。W君はレポートなどで忙しく、あまりクラブの活動には参加できなかったが、今でも1週間に1回ぐらいは顔を出している。

歴史小説を読むようになったのも、この頃からだ。1，2年生の頃は小説などは全く読まず、ずっと専門的なことばかりしていた。でも、退屈だから韓国語のものを両親に送ってもらった。何度も送ってくれというのも気が引けて、よい教科書を探しに本屋に行ったついでに、日本の作家のものも読んでみた。気に入った作家もできた。特に中国の古代を描く作家が好きだ。

最近は授業で出される課題も少なくなったし、自分で自分を管理して、「1時か2時には寝て、7時か8時に起きるから、ある程度規則的に暮らすから、前よりは（疲れ）もかなりよくなったと」思う。

今は「勉強の悩みしか」ない。研究室に配属されても自分の机もないし、教授がなかなか「管理」をしてくれない。教授は自分を大きくしてくれる人だと思う。教授のレベルまで一人で勉強することは本当に努力が必要だ。昔のように「本を読んだだけ」で理解することは難しい。W君たち学生をある程度指導するのが教授の役割だが、「自分で好きなように」勉強しろと言われても困ってしまう。

院試が目の前に迫っている。研究室には机がないので、図書館などで勉強している。特に将来に対する希望はないが、大学院に行ったら、一生懸命勉強して、「新しい珍しい発見するとか、それを解読して発表する」とかしてみたい。そのように科学者として成功すれば、親孝行もできると思う。

日本語もある程度は上手になったが、昔のように新しいことを学んで行く面白さはなくなってしまった。しかしまだ満足はできない。今のW君のレベルでは日本語で話していると、例えばユーモアをユーモアとして受け取ってもらえなかったりすることがあるので、表現できる範囲が狭いと感じる。また、語彙がどうしても少ないので、物事を考えようとすると、考えが浅くなってしまう。

> まず語彙力が落ちるじゃないですか。だから、日本語で考えて話そうとすると、深いことが考えられません。だから、深い考えができないから、何か思考力が全体的に落ちてしまうっていう感じです。

W君の理想は「論争ができるぐらい」日本語が上手になることだ。論争には、論争で使うような「単語」「スピード」が要求されるだけではなく、「その言葉で、論理が」必要だ。「そ

の論理を使っていろいろと単語を総合して、相手にぶつけることだから。そうしなかったら相手が納得しないじゃないですか」。

今4年間の虹野大学での生活を振り返ってみると、いろいろと後悔することがある。学生生活は「おもしろくなかった」。もっと日本人の友だちとも遊びたかったし、アルバイト[17]もしてみたかった。韓国の大学に通っていたら、思いっきり遊んだのは確実だ。レポートや宿題ばかりではなく、自分の勉強も一生懸命してみたかったという思いがある。

> 今ごろまでには全部しなくちゃいけなかったのに、何か残してきたっていう感じでしょ。

これからは、自分の性格を変えるトレーニングをしたり、英語の勉強をしたい。

> だから…大学院に入れば英語の本とかも出てくるし、また時々英語圏の人たちとも何かのコミュニケーションがなければだめだっていうのがあるじゃないですか。そのために。また院試もあるし。そんなのでしょ。

「たくさん色々なことも決心さえすればできる」と思う。大学院を終えたら韓国に帰り、政府の研究所で仕事をしたい。30代後半になったら田舎に帰って田んぼを耕すのもいいなと思っている。

5．考察

5.1.「勉強」することと「遊ぶ」こと

以上、W君のストーリーを述べてきたが、W君の虹野大学の生活に対する不満は、「勉強」についてのことと、遊ぶことの二点に集約されると筆者は考える。以下、この二点について考えていきたい。

5.1.1.「勉強」すること

「勉強」ができることは、幼い頃からW君を特徴付けていることの一つであった。幼い頃は、「勉強」ができることが、兄たちのいじめから身を守るための、また、親の関心をひくための手段であった。さらに、「人より前に出て」韓国銀行の総裁になることが、農業で苦労している親に報いることになると考えていたように、勉強してえらくなることは、

W君にとって親孝行に直結する手段でもあった。

高校までの生活を、W君は冗談めかして「正しい生活」と言っていたが、家と学校を往復し、「しなければならないことを」するという、田舎で育ったことを差し引いても、かなりストイックな学生生活を送ることによって、学部を問わなければソウル大学に入れるぐらいの高い実力をもつに至った。その上、全国で100名の奨学生として政府に選抜されたのだ。虹野大学に入学したころの、前途洋々としたW君の姿はこの辺りからも理解できそうだ。

虹野大学に入ってからもW君は勉強に大きな投資をしている。授業中の説明で分かりにくければ、「よい教科書を探す」ために、週に一度は書店に通い、講義が聞こえなくなるほどストレスが溜まっても、毎回出されるレポートなどの宿題を仕上げるために、何日も続けて徹夜している。

このようなW君の個人的な努力を裏切るように、授業の進度は遅く、クラスメートには覇気がなかった。先生たちも「エリートを育てる」という意識はなく、熱意が感じられないし、授業に出ていても「頭がよくなる」感じがしなかった。その上、教師との関係も希薄で、「自分を大きくしてくれる」人には出会えなかった。周囲からの勉強に対するサポートも得られず、孤独に投資を続けているが、望んでいた高みは手の届かない所に遠ざかっているように感じる。もっと一人で頑張ればいいのだができない。W君の「段々ダメ人間になっている」という自分に対する評価は、この失望の中から出てきたのではないか。

以上のように、W君にとって勉強とは、自分の得意分野であるというだけではなく、勉強にストイックに投資することによって、親孝行をしたいという彼の望みを叶えてくれるものでもあった。虹野大学への留学に、「頭がよくなる」、すなわち勉強がよくできるようになることを最も期待した理由の一つもここにあるのではないか。その期待が、叶えられそうになくなった時、W君の虹野大学への期待は不満に変わったのではないか。

5.1.2.「頭がいい」ことを象徴する「議論」

彼が虹野大学入学前に期待していたことは、「頭がよく」なり、「社会のいろいろなことにも興味をもって」、交友関係を広く持ち、「活発」に暮らすことだったが、そのことを象徴するのが、「議論」というスキルではないか。

このことは彼自身の日本語の理想像からもわかる。彼は筆者の「どの程度まで日本語が上手になればいいか」という問いに対して、「日本語で論争」できるようになることと答えている。スピードと論理を兼ね備えた、相手を説伏することができるような日本語で議論することが彼の望みだ。

また、彼は英語の勉強の必要性を述べているところではっきりと「コミュニケーション」と言っている。研究という文脈で述べている点から考えて、ここでのコミュニケーションとは、日常会話ではなく、研究室の中や国際学会、国際的な共同研究などのアカデミックな場面におけるコミュニケーションだと考えられる。

W君が手に入れたい日本語や英語のスキルとは、議論、つまり論理的な言葉の「やり取り」をすることだと考えられる。

このように考えると、彼の研究室への不満も理解できる。彼の指導教授に対する不満は「管理」がなく、「自分で好きなように」と放任されることだった。自分一人で本を読んで勉強するには今の専門は難しすぎることが不満の原因の一つとして挙げられるだろう。しかし、何よりも放任されることによって、W君は結局図書館で一人で勉強するしかなく、「議論」や「やり取り」という彼のもっとも欲しいものが得られないのだ。さらにそのことは、研究室は本来は彼の将来の成功に通じる通過点の一つであるべきなのだが、そこに通じる道を示してはくれないということを意味していることにもなるのだ。

5. 1. 3.「遊ぶ」こと

W君が虹野大学の生活の中で、もう一つ不満に思っていたことは、友だち関係が広がらないことであった。昼食をいっしょに食べる友だちは同じ学科の中にいるのだが、土日にいっしょに遊んだりする友だちができず、また、学科単位でいっしょに活動をしたりすることもなく、今でも「よそよそしい感じ」の子もいる。W君はどんな友だち関係を期待していたのだろうか。

ストーリーの中では、W君は、高校時代は、教室単位で遊んだと語っている。勉強するだけではなく、友だちを作ったり、遊んだりすることも教室でした。そこではクラス全員が「知り合い」だった。また、韓国の大学には、ＭＴなどがあり、同じ学科の学生と「強制的」に知り合いになるシステムが存在する。

このように何か特定の活動を目的として集まるのではなく、一つのグループに所属する人々が集まることによって、文字通り「親睦」できる半ば強制的なシステムが韓国には存在すると言えそうだ。そこでは、「何をして」遊ぶのかはそれほど問題ではない。集まることによって教室の中には「知らない人はいない」ようになり、W君が育った田舎のように、W君にとって居心地のよい場所ができるのだ。

一方で、W君の学科の日本人の学生たちの中には、学科内で飲み会などの親睦を目的とした場を準備しようという学生はおらず、友だちと「遊びたい」者は、サークルなど、特定の活動を目的に集まった者たちといっしょに遊ぶ。学科の同級生に対するW君と日本人

学生との温度差が明確にあることがうかがえる。W君の友だちが増えないという不満は、学科内の人間関係が、いつまでたっても「知り合い」になれない、居心地の悪い場所だという不満であったと考えられる。

さらに、このような状況の中で、W君は時には友だちに電話をしようとしたが、関係がうまく「回らなかった」。これをW君はなんらかの「技術」が必要だったのに、それがW君には不足していたと述べている。

W君のいう技術とは具体的には何なのか、インタビューでは「連絡をする」と言うこと以外、何も語られなかった。W君にも具体的に何なのかよくわからないのではないかと思える。しかし筆者には、これは技術の問題ではなく、日本人学生とW君との、学科の同級生に期待するものの違いだったのではないかと思える。W君の不満が、学科の中で友だちを作ることをそれほど期待していない日本人の学生に、友だちになることを求めたからだとすれば、W君は大変難しい課題に挑戦しようとしていたと言えるのかも知れない。

5. 2. W君の不満足は彼一人の特徴なのか

前節では、W君の不満の原因を彼のストーリーに沿ってみてきた。それではW君の不満とは、彼一人の問題なのだろうか。

W君の不満とは、大学生活に期待していた、頭がよくなる教育や論理的な言葉のやり取り、さらに友だちとの関係が得られないことに因るものであった。W君が「韓国では××なのに」と虹野大学での不満を語っていたことに注目したい。W君の期待は、彼が育ってきた環境や韓国文化の中では当然と考えられるものであった。言い換えれば、彼は今まで育った環境の中で得た「知識」をもとに、友だちとの交際、先生との関係を作ろうとしてきたといえる。

ここでいう「知識」とは、「日常生活は一貫性をもった世界として人びとによって解釈され、かつまたそうしたものとして彼らにとって主観的に意味のある一つの現実としてあらわれる（バーガー＆ルックマン, 1977: 33)」「自明視されている〈現実〉（前掲書: 5)」を作っている知識のことだ。人びとは、幼い頃からこれらの「知識」を内在化することによって、意味を獲得し、自分の精神を獲得する（第一次的社会化、第二次的社会化)。

移動に伴って、それまでの社会化によって内在化された知識が新しい現実に合わなくなるときがある。そのような場合、第三次的社会化が必要とされるのだが、Alred and Byram（2002）は、それには「認知的、道徳的、行動的」の３つの側面があるとしている。新たな知識を受け入れる時には、それが従来の社会化で内在化された知識に取って代わるのではなく、従来の知識に新たな知識を付け加えるような形で、「中間地点

(middle way)」が模索される。その中間地点（middle way）の特徴は、心地よい（feel comfortable）だということだ。

W君の話に戻ると、W君が留学生活に満足できないということは、現在、W君が韓国で得られた知識をもとに大学生活を送ろうと試みても、「うまく回らない」状況であり、彼自身が現在のところ、中間地点（middle way）を見つけられていないということなのではないか。

W君は幼いころから、他者との関係を作ってきた。その関係から、親、教師、友だち、それぞれのカテゴリーに属する人々に何を期待していいか、どのような関係を作るべきなのかまでを含んだ知識を持つようになった。その知識にのっとって、虹野大学で他者との関係を築こうとしてもうまくいかなかったということなのではないか。教師と学生とキャンパス。韓国の大学と日本の大学は同じ部品からできているが、それぞれに期待される振る舞いは、W君にとっては、似て非なるものであった。

このように考えてみると、W君が虹野大学の中で感じている不満足というのは、彼一人の特殊な問題ではなく、一般に留学生が陥る可能性のある不満足の問題だといえる。

6．まとめ

W君のストーリーから、W君の不満の原因についてみてきた。W君が期待していたのは、「頭がよくなること」であり、教授と学生の「やり取り」や論理的な「議論」であり、さらに学生同士が「知り合い」であることであった。

見方によれば、W君の虹野大学における「面白くなさ」は、学校や親の「保護」や「管理」のもとから離れ、自分で自分を律していかなければならない大学生の問題とも考えることができる。溝上（2004）は、「ユニバーシティブルー」という言葉を使って、日本の大学生の憂鬱について論じている。また、範（2005）は親元を離れ、日本語学校に留学している中国人一人っ子の問題を考察し、彼らの成長を促す「居場所」が必要だと結論付けている。日本人の大学生にも中国人の若者にも共通する青年期の問題が、W君にもあてはまるかもしれない。

しかし、W君の不満は、W君が生まれ育った「韓国」や、そこでの人々の関係の持ち方と切り離すことができない。その意味では、日本の大学生や中国の青年の問題と、同一視することはできないだろう。

留学生活の満足を考える時、「交友関係がよければいい」、「学業が修められればいい」と考えがちである。しかし、本来はそれぞれの留学生が望むものがあり、それこそが、彼

らが留学生活に満足するかどうかの鍵を握っているのだ。そして、W君のように、友人もおり、学業も順当に修めていても期待が満たされず、あせりと不安で密かに苦しんでいる人がいることを、留学生教育に携わるものとして心に留めておきたい。

【注】

1）これらの留学生の中で、韓国からの留学生は15,974人で中国につぎ、第二位を占めている。

2）W君という名前は、調査者である筆者と協力者W君が共同でつけた名前である。

3）その後、10年以上続けることが決定されたという（埋橋淑子氏の御教示による）。

4）筆者は4年間韓国で大学講師として勤務し、その間に韓国語を学んだ。公的な資格としては、帰国後、通産省の観光通訳試験に合格している。

5）中山（2007）参照。

6）W君のプライバシー保護のため、具体的なインタビュー日時は公表しない。

7）このインタビューはキャンパス内の食堂で行われ、録音された。録音時間は71分8秒であった。

8）子どもに漢字を教えるために用いられた長文の漢詩。「そらは天」から始まる。韓国では、現在でも漢字を覚えるために用いられる。

9）韓国では、進学率の高い中学、高校に進学するために引越しをも厭わない家庭が多かった。そのため、抽選によって行く中学、高校を割り振る「標準化」が行われている地域がある。

10）韓国の高校では、高校1年生の時から受験のための勉強に重点がおかれるためか、日本の高校のように、活発にクラブ活動をしているところはあまりない。

11）90年代の韓国の高校生は、正規の授業終了後、教師の監督下で自律学習と呼ばれる自習に参加しなければならなかった。詳しくは大槻（1997）。

12）日本のセンター試験のような全国統一試験。各大学が実施する二次試験もある場合もあるが、実質的には、修能試験の結果が希望大学への合否を決定すると考えてもいい。（有田2006）

13）いわゆるインターネットカフェ。

14）インタビューで使われた言葉のまま。筆者はW君の「対人関係」という言葉を聞き違え「個人関係」と相槌を打っているが、会話はそのまま対人関係について進行している。

15）ちなみに韓国の子ども番組の中に「一人でもできるよ」という番組がある。

16）メンバーシップトレーニングの略。学科やクラブなどの単位で学年を超えていっしょに参加する合宿のような行事。いわゆる「自然の家」など都会を離れたところに出向き、みんなでレクリエーションに興じて、団結を強める目的で行われる。（ナ・ユンジュ氏のご教示による）。筆者が韓国の大学に勤務していた時も、同様の経験をしている。

17）虹野大学では当時国費留学生の資格外活動は認められていなかった。

【参考文献】

浅野慎一（1997）『日本で学ぶアジア系外国人－研修生・留学生・就学生』大学教育出版

浅野智彦（2001）『自己への物語論的接近－家族療法から社会学へ』勁草書房

有田伸（2006）『韓国の教育と社会階層－「学歴社会」への実証的アプローチ』東大出版

荒井真太郎、広沢俊宗（2003）「大学に対する満足度の規定因に関する研究－日本人学生と留学生の比較」『関西国際大学研究紀要』（4）155-167

岩男寿美子、萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生－社会心理学的分析』勁草書房

D．エプストン＆M．ホワイト（1997）「書き換え療法－人生というストーリーの再著述」S・マクナミー、K．J．ガーゲン編　野口裕二、野村直樹訳『ナラティヴ・セラピー－社会構成主義の実践』金剛出版139-182

大槻健（1997）『韓国の子どもと教育』あゆみ出版

岡益己、深田博己、周玉慧（1996）「中国人私費留学生の留学目的及び適応」『岡山大学経済学会雑誌』（27）4、25-49

萩原公世、今村義正（1987）「留学生の「日常生活領域」の満足度」『東海大学紀要学生生活研究所』（17）33-38

金城かおり（2003）「琉球大学における留学生支援体制と留学生の満足度－「帰国留学生アンケート調査」及び「留学生アンケート調査」を基に」『琉球大学留学生センター紀要　留学生教育』（1）17-33

K．J．ガーゲン（2004）『社会構成主義の理論と実践－関係性が現実をつくる』永田素彦・深尾誠訳ナカニシヤ出版

坂野永理、岡益己、光元聰江（2003）「満足度調査にみる中国人私費留学生の特徴」『留学生交流・指導研究』（6）23-39

坂野永理、岡益己、光元聰江（2004）「日本語力の違いにみる外国人留学生の満足度」『岡山大学留学生センター紀要』（11）1-12

桜井厚（2002）『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方』せりか書房

桜井厚（2005）「ライフストーリーからみた社会」山田富秋編著『ライフストーリーの社会学』北樹出版pp.10-27

玉岡賀津雄、中矢礼美（2006）「2005年前期・後期の2回の留学生支援調査より－広島大学留学生支援調査「満足度指標」の分析結果報告」『留学生教育』広島大学141-153

中山亜紀子（2007）「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴－「自分らしさ」という視点から」『阪大日本語研究』（19）大阪大学大学院文学研究科日本語学講座97-128

独立行政法人日本学生支援機構「留学生受入れの概況」（平成18年度版）アクセス日2007年９月26日http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data06.html

能智正博（2006）「“語り”と“ナラティブ”のあいだ」能智正博編『〈語り〉と出会う－質的研究の新たな展開に向けて』ミネルヴァ書房pp.11-72

Ｐ．Ｌ．バーガー＆Ｔ．ルックマン（1977）『日常世界の構成－アイデンティティと社会の弁証法』山口節郎訳　新曜社

範玉梅（2005）「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」『阪大日本語研究』（17）大阪大学大学院文学研究科日本語学講座59-90

ブルーナー、ジェローム（1998）『可能世界の心理』田中一郎訳　みすず書房

フランク、アーサー（2002）『傷ついた物語の語り手－身体・病い・倫理』鈴木智之訳　ゆみる出版

ホルスタイン、ジェームズ＆グブリアム、ジェイバー（2004）『アクティブ・インタビュー－相互行為としての社会調査』山田富秋他訳　せりか書房

溝上慎一（2004）『現代大学生－ユニバーシティブルーの風に揺れる』ＮＨＫブックス

山田富秋編（2005）『ライフストーリーの社会学』北樹出版

やまだようこ「人生を物語ることの意味－ライフストーリーの心理学」『人生を物語る－生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房pp.1-38

Alred, G. and Byram, M. (2002). Becoming an Intercultural Mediator: A Longitudinal Study of Residence Abroad. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 23. (5). 339-352. Ritrived August 8, 2007, from http://www.multilingual-matters.net/jmmd/023/0339/jmmd0230339.pdf

Creswell, J. W. (1998). *Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Traditions*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Duff, P. A. (2002). The discursive co-construction of knowledge, identity, and difference: An ethnography of communication in the high school mainstream. *Applied Linguistics*, 23. 289-322.

Furnham, A. (1997). The experience of being an overseas student. In D. McNamara & R. Harris, (Eds.), *Overseas Students in Higher Education: Issues in teaching and learning* (pp. 13-29). London: Routledge.

Furnham, A. and Tresize, L. (1983). The mental health of foreign students. *Social Science and Medicine*, 17, 365-70.

Kinginger, C. (2004). Alice doesn't live here anymore: Foreign language learning and

renegotiated identity. In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Context* (pp. 219-242). Clevedon: Multilingual Matters,

Kvale, S. (1996). *InterViews: An Introduction to Qualitative Research Interviewing*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Mann, S. J. (1992). Telling a life story: issues for research. *Management Education and Development*, 23 (3), 271-280.

Morita, N. (2004). Negotiating participation and identity in second language academic communities. *TESOL Quarterly*, 38 (4), 573-603.

Pavlenko, A. (2004). 'The making of an American': Negotiation of identities at the turn of the twentieth century. In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Context* (pp.34-67). Clevedon: Multilingual Matters.

(文学研究科研究生)

(2007年 8 月24日受付)
(2007年10月 4 日修正版受付)
(2007年10月19日掲載決定)